

## 書簡資料から見る忍頂寺務

内田 宗一

### はじめに

小野文庫には忍頂寺務宛の書簡が数多く収められており、務の事績や交友関係を知る上で貴重な資料となっている。その概要については先に内田（二〇〇七）において報告し、若干の考察を行ったが、その時点ではまだ全点調査の中途であり、考察が充分に行き届かない点も残っていた。また、その後の調査によって、小野文庫に所蔵される以外にも忍頂寺務宛の書簡が各所にまとまった数で現存していることも新たに明らかとなった。本稿は、小野文庫以外に所蔵される忍頂寺務宛書簡も範囲に含めた上で、それらの資料から読み取ることのできる忍頂寺務の事績や著述活動のありよう、交友関係等についてさらなる考察を行うことを目的とするものである。

### 一、書簡資料の概要

まず、現在までに確認されている忍頂寺務宛書簡の全体像を概観する。

#### 1、小野文庫<sup>422</sup>〔忍頂寺務宛書簡〕 一三六五点

本資料の詳細は、本報告書所載の「小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録

・解題（附・差出人氏名リスト）」、内田（二〇〇七）、青田ほか（二〇〇八）所載「附・小野文庫<sup>422</sup>〔忍頂寺務宛書簡〕差出人別リスト」を参照。なお、青田ほか（二〇〇八）所載「附・小野文庫<sup>422</sup>〔忍頂寺務宛書簡〕差出人別リスト」においては点数を一三六六点と記していたが、その後の調査により、務以外の者に宛てた書簡が一点混入していたことが明らかとなったので、それを除外して点数を一三六五点と修正する。なお、本報告書所載の「小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録・解題（附・差出人氏名リスト）」では、これまで差出人不明となっていたものについて、その後の調査の結果差出人名が判明したものがあつた場合はそれを補うなど、適宜修訂を行っている。

#### 2、仙台忍頂寺家蔵〔忍頂寺務宛書簡〕 一四七点

忍頂寺晃嗣氏所蔵。本資料の詳細は、青田ほか（二〇〇一）所載「附・〔忍頂寺務宛書簡〕差出人別リスト」を参照。内田（二〇〇七）で述べたとおり、書簡資料を小野文庫として大阪大学へ収蔵するにあたっては、プライバシー保護の観点から親戚関係や個人的な知友からのものと目される書簡については小野麗子氏に選別してもらってそれらは小野氏へ返却し、それ以外のものを受け入れるという手順を踏んだ。仙台忍頂寺家

蔵の書簡二四七点のうち二二五点は、小野文庫収蔵の際の選別作業で小野麗子氏へ返却したものである。

3、天理大学附属天理図書館蔵

高野辰之書翰集 三〇点（請求記号：九一六 イ七）

三田村鳶魚書翰集 四〇点（請求記号：九一六 イ五）

務自身が天理図書館へ寄贈したものである。小野文庫に所蔵される「年次不明四月二五日付富永牧太書簡」は、この寄贈に対して当時の館長・富永牧太から務に宛てて送られた礼状である。

年次不明四月二五日付富永牧太書簡（小野文庫）

本日中村研究員氏より、貴重なる三田村高野二先生の御書翰本館に御惠贈被下有難く篤く御礼申上候 永く館蔵して後世の資と致度く早速整理架蔵仕候

「高野辰之書翰集」は大正一五年二月二八日から昭和七年一二月二一日に至る期間の書簡、「三田村鳶魚書翰集」は大正一四年一月二一日から昭和一四年九月一四日に至る期間の書簡から成る。これら天理図書館に所蔵される計七〇点の書簡は、全てが封書で、かつ巻紙に毛筆で記されたものであるという特徴を有する。一方、小野文庫に所蔵される高野辰之書簡九点はいずれも八ガキもしくはペン書きの封書であり、また三田村鳶魚書簡一四九点はそのうち一四八点までが八ガキである。これらのことを勘案すると、天理図書館へ寄贈する書簡を選ぶに際しては、書簡に記された内容を考慮するのではなく、封書かつ墨書であるものと

いう体裁の面に着目して選別がなされたものと推察される。なお、天理図書館に所蔵される全ての書簡には、封筒表面に差出年月日を記した務自筆の付箋が貼付されており、務自身が整理を施した上で寄贈を行ったことが窺える。

二、書簡資料による忍頂寺務評伝の補足

本節においては、書簡資料の調査から新たに明らかとなった忍頂寺務の事績および著述について述べていく。

二・一、事績

まず、忍頂寺務が一時期、大学の講師職に就いていた点について述べておきたい。仙台忍頂寺家所蔵「昭和三年一二月二四日消印井筒正三書簡」には、以下のような「証明書」が同封されている。全文を引用する。

証明書

本籍地 兵庫県津名郡志筑町一五七〇 一  
旧住所 兵庫県津名郡浦村絵道  
新住所 東京都世田谷区一丁目一三三 三田村方  
忍頂寺 務

明治十九年十二月八日生

右の者は本学専門部講師として昭和二十三年九月廿五日より就任せ

り依つて之を証明する

昭和廿參年九月廿七日

東京都文京区原町十七番地

東洋大学長 加藤虎之亮（公印）

忍頂寺務は貿易商を営むかたわら近世歌謡研究に従事した在野の研究者として知られており、大学の講師職に就いていたという経歴については、これまで明らかになつていなかった<sup>(1)</sup>。この証明書に記される昭和二三年九月は、務が東京の三田村鳶魚邸に寄宿していた時期にあたり、証明書の「新住所」にも三田村邸の住所が記されている。三田村鳶魚の日記によれば、務が三田村邸に寄宿していたのは昭和二三年一月までであるので、東洋大学の講師職に就いていたのもごく限られた期間であると目される。このことについて東洋大学へ照会したところ、昭和二三年当時の資料を調べたが忍頂寺務に関する記録は残つておらず、具体的な担当業務の内容等は不明である、記録が残っていないという点から専任ではなく非常勤講師のような形であつたのではないかと推察されるとの回答があつた。なお、務が東洋大学の講師となつた背景には、当時、東洋大学教授であつた吉田幸一が三田村鳶魚を訪問した際に、務とも面識を得たというきつかけがあつたものと考えられる<sup>(2)</sup>。また、三田村鳶魚の日記の昭和二三年九月二十八日には、「吉田幸一氏つかひ、東洋大学嘱託証明書届く」との記載が認められる（『三田村鳶魚全集』第二七卷（中央公論社、一九七七年））。この「東洋大学嘱託証明書」が誰のものであるのか日記の記載からは確認できないが、これが先に引用した証明書のことを指している可能性も考えられる。

次に、忍頂寺務の美術愛好家としての側面を窺える書簡を見てみたい。

大正一四年一月二日付小早川秋声書簡（忍頂寺家）

本日友人の宅で待つてゐる間に手近にあつた本月の美術雑誌を手にしてみましたら「美術愛翫家録」の中に貴下の御芳名を拝見いたしました何んなふ懐かしい様な涙ぐましい様な気がそゝられましたのでお便りいたしました次第です

この書簡には次のような雑誌の切り抜き記事が同封されている。

忍頂寺務氏（会社支配人）

氏は実業界の新人にして、新画に趣味を有し、小早川秋声氏の代表的作『文殻を焼いて』は実に氏の愛蔵品である。現住 神戸市ウイリヤム会社内

小早川秋声自筆書入「当月号美術春秋の中に」

差出人の小早川秋声は従軍画家としての活動でも知られる日本画家で、小野麗子氏によれば務の友人であつたことである。仙台忍頂寺家は小早川秋声の書簡が八三点と数多く存するとともに、務に宛てた旨の為書きを添えた小早川秋声画の内敷が所蔵されており、務と小早川秋声が親しく交際していたことが窺える。務が書画や刀剣の収集に強い関心を抱いていたことは、内田（二〇〇七）でも述べたとおりであるが、美術雑誌上でその名が紹介されていたということから、当時美術愛好家として、斯界において一定の知名度を有していたのではないかと推察される。

最後に、務のラジオ番組への出演が確認できる書簡をあげておきたい。

昭和七年九月一日付高野辰之書簡（天理）

斯道の為とは申し乍ら遠路御東上を煩し名曲鑑賞の夕第十一回の御説明を願ひ候段深謝此事二御座候

この書簡からは、務が高野辰之の依頼で「名曲鑑賞の夕」なる番組に解説者として出演したことが読み取れる。この書簡を手がかりに、当時の新聞のラジオ番組欄を閲覧したところ、『東京朝日新聞』昭和七年九月四日のラジオ番組欄に「七時五十分 名曲鑑賞（第十一回）清元「御名残押絵交張」（解説）忍頂寺務（実演）清元栄寿太夫社中」との記載が認められた。同紙には、あわせて務の手になると目される次のような解説記事が、務の顔写真とともに掲載されている（本稿巻末 図版1）。

「名曲鑑賞 軽快なナンセンス物 清元「鳥羽絵」 後七時五十分（解説）忍頂寺務」

清元の「鳥羽絵」は本名題を「御名残押絵交張」といひ、文政二年九月江戸の中村座で二番目大切に三代目加賀屋歌右衛門が演出したる九変化所作事の中の一つである。作者は二代目桜田治助、振付は藤間助助（後の四代目西川扇蔵）と松本文弥とであった。清元節が富本から分離して、延寿太夫の名前で始めて舞台に発表せられたのは、今から百十九年以前、文化十一年十一月、江戸の市村座を最初とする。それから五代目の現家元までに所演のうたは数百に上り、その中で「鳥羽絵」は現今の如きスピーディな時代に適應するナン

センス物として、誠に上乘の作品である

この浄りの解説を主として、これに清元五代にわたる簡単な歴史、三代歌右衛門の話及び西川扇蔵のこと等を付加したいと思ふ

なお、このように具体的な出演年月日や番組名を判明させることは困難ながら、このとき以外にも務がラジオに出演する機会があったらしい。例えば、小野文庫所蔵「昭和一二年四月二三日付秋庭太郎書簡」には、前年のラジオ放送を拝聴したとの記載があり、昭和一年のいずれかの時期にも務がラジオに出演していたことが確認できる。また、同じく小野文庫に所蔵される「忍頂寺務執筆新聞記事切り抜き」（小野475）も、掲載紙および発行年月日は不明ながら、一中節「道成寺」全曲放送の解説を務が担当する旨が記されている。

## 二・二、著述

忍頂寺務宛の書簡の中には、雑誌の発行人・編集者らとの間で交わされた執筆依頼や原稿のやりとりに関わる内容のものや、務の論考に対する感想・意見等を記した内容のものも数多く見られ、それらの記事によって、従来知られていなかった務の著述の存在が確認されるケースも存する。そうした例を以下に列挙して、新たに確認された務の著述を報告する<sup>(3)</sup>。

昭和二年一二月七日消印松川弘太郎書簡（小野文庫）

過日拝受の玉稿江戸往来第四号へ掲載させて頂きましたので不取敢  
同誌御送呈申上げましたから御高披下さいませ 活字印刷と違ひ校

正か出来ませんので誤脱等のありました点は何卒御諒恕をお願い致します。右御礼まで

この記事にもとづき、松川弘太郎が発行人となつてゐる雑誌『江戸往来』を調査したところ、以下の二点の著述の存在が確認できた。

忍頂寺務「センボ追考」(『江戸往来』第一巻第四号、昭和二年二月)  
忍頂寺務「センボ考追加」(『江戸往来』第一巻第二号、昭和三年二月)

また、次にあげる英十三および町田嘉章の書簡にも、務の著述に関する情報が見られる。

大正一四年三月一〇日付英十三書簡(小野文庫)

延寿清話第六冊難有落掌御努力敬服致居候 うた沢本月号の御記事も大変興味深く拝見仕候 うた沢小唄等はさほど古からざるも作者調者等知られ居るもの少きに貴稿の如き実に得難き資料にて啓発する所少からず候

大正一四年三月九日付町田嘉章書簡(小野文庫)

湯浅氏を通しての「うた沢」紙上での御意見も頗る面白く拝見いたしました。

両書簡の情報をもとに、大正一四年刊行の『うた沢』を調査したところ、次の著述の存在が明らかとなった。

忍頂寺順和尚「小唄節の文献と消息 竹山人著「はやま小唄全集」を讀みて」(『うた沢』第七号、大正一四年二月)

ただし、この著述の成立過程については、やや注意が必要である。この文章の冒頭には、湯朝竹山人による次のような経緯説明の文が付されている。

忍頂寺君とは十月に初めて逢ひ、今、年末までに互に数回の往問を交換し、その間にまた多数の通信を交換した。その来信の内で、小唄節に関するものが十数通に及んでゐる。私はこの小唄通信を自分の筐底に仕舞つておくのは惜しいことに思ひ、これを公開して同趣味の諸子へ発表したいと思ひ、忍頂寺君へその由を伝えると、同君も快諾したのである。

本篇は、即ちその小唄通信を私が順序をつけて一篇の記事に編輯したものである。見易いように私が勝手に見出しもつけておいた。但し、完成後に忍頂寺君が眼を通して呉れ、題名も同君と相談の上でつけたのである。(大正十三年十二月) (七ページ)

つまり、この著述は務より竹山人へ送った書簡の内容を竹山人が編集して成つたものであり、務・竹山人兩名の手を経てまとめあげられたものと言える。そのような事情のためと思われるが、この文章は湯朝竹山人の単著である『小唄研究』(大正一五年一月、アルス)にも、先に引用したような事情説明の文を付した上で収録されている。なお、『うた沢』第七号は小野文庫にも所蔵されており(小野291)、当該の記事には務自筆

で訂正や補筆の書き入れがなされている。そして、その書き入れの内容の多くは『小唄研究』所収の本文と一致していることが確認できる。ただし、竹山人が務の書き入れを『小唄研究』の刊行にあたって反映させたのか、務が『小唄研究』の刊行後に校異を『うた沢』に書き入れたのか、その先後関係は判然としない。

また、務の著述それ自体を実際に確認することはできなかったものの、何らかの寄稿がなされたということが確認できた例として、次の三世清元梅吉の書簡があげられる。

昭和一五年二月九日付三世清元梅吉書簡（小野文庫）

借、突然此の状差上げ候非礼幾重にもお赦し下被度候 実は昨年五月、年一回発行の「清元流報」なる小冊子を発刊仕り、此の度、第二号を発行するに当り翼くば先生の玉稿を頂戴仕り度く、実は、その儀につき候ては、昨年創刊当時、三田村鳶魚先生の「江戸読本」に係り居らるゝ綿谷雪氏に依頼し、是非、忍頂寺先生の玉稿お願い下されたと申し依頼仕り候も、同氏も多忙なりし為か、そのまゝとなり、洵に残念に存居候

洵に勝手なる儀にて恐縮に存じ候共枉げて御承諾を賜らば幸甚に御座候 尚、別途創刊号一部お送り申上候間御高覧を賜り度く候

昭和一五年四月一八日付三世清元梅吉書簡（小野文庫）

先日は、まことに勝手なお願ひを申上げまして御迷惑の事と恐縮いたしました居りましたが、御多忙中にも拘はらず早速に結構なる玉稿をお送り下さいまして、まことに有難う存じました。

小野文庫には昭和一四年五月に刊行された『清元流報』創刊号が所蔵されており（小野305）、これが昭和一五年二月九日付書簡で述べられている三世清元梅吉から送付された冊子の現物と捉えられる。昭和一五年四月一八日付では第二号掲載用の原稿を受領した旨が述べられているので、何らかの著述がなされたことは分かるものの、現在までのところ、『清元流報』第二号を所蔵する機関を見つけることができておらず、具体的な論題や内容を確認するには至っていない。さらに言えば、『清元流報』の第三号以降の号の所在も判明していないため、第二号が実際に刊行されたのか自体も確認ができていない状況にある。

最後に、務自身による著述とは区別して扱うべきものではあるが、新聞記事を調査する中で、務に対するインタビューをもとにまとめた記事が見出された。務の評伝を考える上で参考となる情報が多く含まれているので、これもあわせて紹介しておきたい。『東京日日新聞』昭和九年九月二二日掲載の「獺書の趣味を聴く 関西版に目をつけて 歌謡本を捜す 苦心の集成『都踊どき』 忍頂寺務氏」と題する記事である（本稿巻末版2）。この中で務は、自らの集書について次のように述べている。

私が軟派の本を漁りはじめてから廿年にはなります。はじめは神戸高商を出て実業に従事する傍ら江戸時代の経済を調べはじめたのですが草双紙や洒落本の方が面白くなり遊郭、芝居とだんだん手が拡がり、今では一転して専ら徳川時代の歌謡の本を捜してゐます。

この新聞記事が掲載された昭和九（一九三四）年の二〇年前というのは、大正三（一九一四）年あたり、務の当時の年齢は二八歳である。

小野文庫所蔵「忍頂寺務略年譜」(小野<sup>47</sup>)は、務の令嬢・小野麗子氏によつてまとめられた務の年譜であるが、そこには「大正10年頃より本集める?」との記載がある。務が集書を開始した時期に関しては、小野麗子氏自身もはっきりとしたことは把握できていなかったようであるが、この新聞記事によつて、実際にはもっと早い時期から本を集め出していたこと、また当初は江戸時代の経済に関心があつて、そこから興味の範囲が広がつていったことが分かる。

また、記事の中では自身と俳句との関わりについても、次のように述べられている。

私が淡路の洲本中学に通つてゐた頃、校長は永田青嵐氏、昨年物故した子規派の有名な俳人大谷繞石氏は英語の教師だつたので三年になつた頃から俳句をやりはじめました、後に俳壇の鬼才と謳はれた高田蝶衣は同級生で非常に学問の出来る人でしたが俳句に凝り出してから成績が悪くなり辛うじて卒業しました、私が軟派のものへ導かれたのも俳句の影響で、また歌謡の本に熱心になつたのは元來長唄、清元が好きだからです。

務が近世文学研究の道を進むことになつたきっかけとして、俳句から受けた影響の大きさを自ら述べている点は大いに注目される。なお、ここで名前のがあがつている永田青嵐(秀次郎)、大谷繞石(正信)、高田蝶衣については、いずれも小野文庫に務宛書簡が所蔵されている。特に大谷繞石は、大正一三年から死の前年にあたる昭和七年に至るまで、年賀状や礼状、挨拶状といった簡潔な内容のものが大半ながら、継続して務

に書簡を寄せており、務との関係が晩年まで続いていたことが窺える。さらに記事では、蔵書印について次のように述べられている。

私は仕事の都合上今度はちよつと長く東京にゐなければならぬので、こゝ(市ヶ谷本村町)に仮寓し、神戸に書物を残して置くに忍びず好きなものだけは持つて来ましたが火事がこはくてスーツケースに詰めていつでも持ち出せるやうにしてゐます。蔵書印もたつた一つしか持つて来ませんでした。父の代からのものですが父の蔵書同様に目にかけるやうなものではありません。

ここで述べられている父の代からの蔵書印とは、恐らく紙面に印影が紹介されている「忍頂寺蔵書章」印のことと目される。忍頂寺務の蔵書印については、「文学部創立五十周年記念 忍頂寺文庫特輯」(『語文』第七〇輯、一九九八年)において五種の印影が紹介されているが、そのうちの一つの来歴が明らかとなつた点は興味深い。なお、五種の蔵書印は現在、仙台忍頂寺家に全て所蔵されている(本報告書所収の青田寿美「忍頂寺文庫・小野文庫所蔵資料押捺蔵書印一覧」参照)。

### 三、寄稿依頼の書簡をめぐる考察

現存する書簡資料によれば、大正一四年以降、忍頂寺務に対してさまざまな雑誌発行人からの寄稿依頼のあつたことが確認できる。務の著述活動については、『大江戸之研究 延寿清話』や『清元研究』といった雑誌を発刊したという経歴もあつて、自ら発表の場を積極的に求めていく

という姿勢が目立ちやすい。しかし、書簡資料を精査していくと、著述の中には相手からの求めに応じて書かれたものも一定数存することが分かる。さらに、寄稿依頼の書簡と著述目録とを対照させると、寄せられた執筆依頼の全てにに応じていたわけでもなかったことが分かり、務の著述活動への向き合い方について、これまでとは異なる捉え方のできる面も見えてくる。著述活動に対する務の姿勢を考える上で、寄稿依頼の書簡は重要な資料となると言えよう。本節では、寄稿依頼の書簡の分析を通じて、忍頂寺務の著述について、その執筆の具体的な経緯を可能な限り明らかにするとともに、著述活動に対する務の態度のありようについて考察することとしたい。

以下、書簡資料の全点調査の中で見出し得た寄稿依頼の書簡と、それに関連する内容を有する書簡を列挙していく。配列は年代順とする。寄稿依頼の書簡の引用文の上には、その依頼への対応に応じて、以下の通り記号を付した。

.. 執筆されたもの

x .. 執筆が確認できないもの

.. 遅れて執筆されたもの

? .. 不明

また、書簡の引用文の後ろには、「」に続けて補足情報を記した。

? 大正一四年一月四日消印石川巖書簡（小野文庫）

年末号はとうく出でず新年号と合併と極め申候 一月二十日頃発市

の豫定二候 何か御寄稿賜らば結構二候が矢はり御多忙の御身故御願ひも如何かと存じ候

「諸家来信抄三」（『書物往来』第六冊、大正一四年一月）か。なお、この「諸家来信抄三」に掲載されている忍頂寺務書簡は、一月九日付および一月一日付の二点。

x 大正一五年二月一日付磯ヶ谷紫江書簡（小野文庫）

研究誌の外に、「墓蹟」といふ雑誌を四月より隔月に発行します 目的は全国に墓蹟の調査をいたしたいとおもつておます 而して諸家の玉稿をあつめたい目的です。墓に せすとも史料になるべきものなら何にてもよいのです 何か一つ原稿を頂戴することは出来ませいか おねがひします

『墓蹟』一〜一四（大正一五〜昭和四年）には全号にわたって寄稿なし。

x 大正一五年五月二二日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

彗星呈上致候 御覽被下哉 借何そ一篇御寄送被下度御願申上候

『彗星 江戸生活研究』の直近の号に掲載は確認できず。

大正一五年七月一七日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

前略 彗星へ掲出のため高文一篇御無心申上候 本月卅一日まで御投与被下候は幸甚存候

大正一五年七月二四日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

高文早速御投惠二相預萬謝此事二候

「酒のお江戸」（『彗星 江戸生活研究』第一巻第六号、大正一五年八月）

昭和二年三月二二日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

歌舞伎研究丸岡氏より御筆勞願出へく候間宜敷御世話被下度候

「三升紋の新考察」、『歌舞伎研究』第一二輯、昭和二年五月（

× 昭和二年五月一〇日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

彗星へ何か御書き被下度御願申上候

『彗星 江戸生活研究』の直近の号に掲載は確認できず。

× 昭和二年六月二八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

毎度ながら彗星へ御寄稿願上候

『彗星 江戸生活研究』の直近の号に掲載は確認できず。

× 昭和三年一月二五日付有山麓園書簡（小野文庫）

さて俳三昧三月号に何か 之御貴稿一篇掲載之栄を得度幸ひに候

へは御投惠之程偏に願上候

『俳三昧』昭和三年刊行分（第六巻）に掲載は確認できず。

昭和三年八月六日消印石川巖書簡（小野文庫）

次二伊藤氏の書物の趣味は何か御尽力願ひたし その代り何か執筆  
することを予約します

「潮来節の文献と「笑本板古猫」」、『書物の趣味』第三冊、昭和三年（二月）

× 昭和四年一月一八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

新刊高美珍重奉存候 御禮から欲か出て今月は是非彗星へ何か御筆  
勞相願度候

『彗星 江戸生活研究』の直近の号に掲載は確認できず。

昭和四年八月一八日付木谷蓬吟書簡（小野文庫）

初此度小生別紙主旨の下に月刊『大阪人』を出す事と相成候に就て  
は郷土研究の先輩たる貴台の御賛同御援勢により大成いたし度と切  
望いたし居候 それにつき甚だ恐入候へ共大阪に関する御玉稿をぜ  
ひに御寄与願ひ度と存候が何卒御許容たまはり度御願ひ迄申上候

昭和四年九月九日付木谷蓬吟書簡（小野文庫）

啓 先便さし出しました後、貴稿到着、たしかに拝受いたしました、  
忝う存じます

（中略）

実は、切切迫に付き暑ぼ編輯も終り、貴稿のページ数を測定して残  
して置きましたが、ちよつとはまり込まぬやうな状態になりました  
ので、これは甚だ申上兼ねますが、来月号に掲載させていたゞく事  
に御諒認を得たいと存じますが……十一月号にはぜひく頂戴いた  
したいのですから、何卒この失禮を御ゆるし下され御許諾を與へら  
れたく懇願いたします、

「七十五年前の 大阪料理店名寄せ」、『大阪人』第三号、昭和四年（一月）

昭和四年一〇月二三日付石割松太郎書簡（小野文庫）

さて誠に御馴染もうすきに勝手なる御願ひに候が右月刊へ何か御研

究の声曲もの高文頂戴致し度く

昭和四年一〇月二九日付石割松太郎書簡（小野文庫）

早速御高文頂戴忝く存じ候 御題材も結構に存じ候

「上方の潮来節に就て」、『演芸月刊』第六輯、昭和四年一月）

昭和四年一月六日付大曲駒村書簡（小野文庫）

過般御願申上候件に付早速御快諾の御返事頂戴仕り光栄に存じ候  
連中も略二十名と相成いよく来春第一号発行の事と相成候 就いては何か原稿早速（本月中）頂戴仕度

「吉原よぶこ鳥」の発見」、『赤本屋』第一号、昭和五年一月

昭和六年一月八日付南木芳太郎書簡（小野文庫）

二月原稿切十二日といたします。東山絵巻その二頂戴出来れば結構かと存じます。

昭和六年一月一五日付南木芳太郎書簡（小野文庫）

原稿正に拝受御高配難有奉謝候

「東山絵巻その二 河東の女」、『上方』第二号、昭和六年二月）

× 昭和六年六月一二日付大曲駒村書簡（小野文庫）

「あかほんや」原稿等二十五六頃までにてよろしく候間何卒御寄稿願上度申添候

『赤本屋』には前掲の創刊号以外に論考の掲載は確認できず。

× 昭和六年七月二七日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

珍書（引用者注・『諸分重宝記』）恵投多謝 折柄今昔へ御加勢願上候 昨日より浮世風呂輪講相始申候（4）

『今昔』一 一〇六 三（昭和五〇一〇年）には全号にわたって寄稿なし。

× 昭和九年一月一日付尾崎久弥書簡

小生編輯にて昨年より『観音』を続刊、『清元の浅草物』など御高稿願入候

『観音』一〇一（昭和八〇一六年）には全号にわたって寄稿なし。

× 昭和一二年五月一二日付大阪朝日新聞社学芸部書簡（小野文庫）

さて今回本紙に左の題材にて貴下の御寄稿をお願い致したく御多忙中恐縮ながら左記条項お含みの上何卒御承引のほどお願い申上げます

追て御手数ながら諾否のほど折返し御返事に預りたく存じます

一、締切 五月二十日

一、分量 四百字詰原稿用紙 二枚

一、題材 ラヂオ批評「聴取者三百万突破記念放送」

掲載は認められない。

× 昭和一二年六月一日付大阪朝日新聞社学芸部書簡（小野文庫）

さて今回本紙に左の題材にて貴下の御寄稿をお願い致したく御多忙

中恐縮ながら左記条項お含みの上何卒御承引のほどお願い申し上げます

追て御手数ながら諾否のほど折返し御返事に預りたく存じます

一、締切 六月十五日（十五日の午後二時まで）に速達で頂戴したいと思ひます。）

一、分量 四百字詰原稿用紙 二枚（少々超過も結構です。）

一、題材 「長唄の夕」放送評

掲載は認められない。

× 昭和一三年八月八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

恩借品二点別封返上仕候 御都合にて来月にも御執筆御願申上候

該当する著述はこの時期には認められない。

昭和一三年八月三日付齋藤昌三書簡（小野文庫）

七代目の成田版については是非御寄稿をお願いいたします。

年次不明四月一日付書物展望社書簡（小野文庫）

さて、突然ながら兼て、御寄稿下さる趣きの七代目の成田本について、もし今五月号に御執筆たまはらば大慶幸甚に存じます。

年次不明四月二四日付書物展望社書簡（小野文庫）

さて、先般御承諾を得ました玉稿、六月号誌上には是非掲載させていただきます。度々存じます。

「しもふさ 身旅喰」（『書物展望』第九巻第七号、昭和一四年七月）か。なお、四月一日付と四月二四日付の二通の書簡は同一の封筒に入れられており、封筒の宛先住所は神戸市灘

区篠原南町となっている。務がこの住所に居住していたのは昭和一二〇年の時期であり、掲載誌発行年と照らし合わせても矛盾は生じない。

昭和一三年九月四日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

江戸読本題言十月分御願致度候

昭和一三年九月一日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

江戸読本第五巻頭言御投与御願申上候、乍勝手来月三日までに相届候様御配慮被下度候

昭和一三年一〇月三日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

高文早速拝受恭悦存候 直二連中へ相渡可申候

「巻頭言」（『江戸読本』第一巻第六号、昭和一三年一月）。

もとは一〇月発行の第五号掲載分の依頼だったものが、一一月発行の第六号の掲載となったことが窺える。

昭和一三年二月二日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

江戸読本七差上候事と存候 八にては久々清元研究出来候事と楽しみ居候

「色山解深川（上）」（『江戸読本』第二巻第二号、昭和一四年二月）

昭和一四年三月二日付三田村鳶魚書簡（天理）

意外に御目二掛り大ニ喜ひ申候 其節申上候通四月号二は是非清元を出し度只今笹本氏へも話いたし候 乍勝手御筆芳くれくも御願

申上候 又江戸図彙資料これは来廿五日まで一点御世話被下度候  
一点はつり格子を出し候心得二付吉原でなきもの欲しく候 原本を  
拝借いたし候までもなく写真一葉御投与被下候へはと存候 此分は  
解説も御筆労相願度候 実は昨今日本人大目へ拙生一分之倫理主張  
を書き続け居候ため手廻り兼候まゝ鈴木南陵氏へ江戸字引の方を托  
し候 今月江戸図彙御援助相願のみならず爾後も御心附被下候様二  
平二御願申上候

昭和一四年三月二〇日付三田村鳶魚書簡(天理)<sup>(5)</sup>

江戸図彙御世話被下難有御礼申上候 如何にも大サ適當之もの無之  
大野氏へ頼み一揮之積二候 駕籠も尚数種出し度御考置被下度候

清元原稿くれくも宜敷御願申上候

昭和一四年三月二六日付三田村鳶魚書簡(小野文庫)

乍勝手次号へ掲載いたし度候間清元原稿御急ぎ御遣し被下度候 其  
積りにて締切おき候

昭和一四年四月四日付笹本寅書簡(小野文庫)

御原稿御間に合はぬ由、失望いたしました。何卒次回切(月末)  
までには是非御執筆を賜りたく拝 御願申上ます。

昭和一四年四月一三日付三田村鳶魚書簡(天理)

江戸読本も来月は十二冊目二相成候 其後に増刊出し度との事御手  
都合次第是非清元研究掲出致度候 (中略) 尚図彙之御加勢も願  
上候

昭和一四年四月二六日付三田村鳶魚書簡(小野文庫)

昨日の締切に明け置候間清元研究御急ぎ御遣し被下度願上候 勝手  
之儀にて恐入候へ共是非御遣しの様二御願申上候 或は少分にて毛

宜敷候 くれくも御願申上候

昭和一四年四月二七日付三田村鳶魚書簡(天理)

御手紙拝見仕候 左様二候共来月御筆労御願申上候

参考 『三田村鳶魚日記』(三田村鳶魚全集 第二十七卷)中央公論社、一九七  
七年)

昭和一四年四月二八日条

忍頂寺氏よりの書物五点、笹本氏持参により預置、忍頂寺氏  
原稿間に合す、鈴木氏へ依頼状出す。

昭和一四年四月三〇日条

忍頂寺氏より清元原稿届く、柴田氏へ転致。

「忍逢春雪解」(江戸読本 第二卷第六号、昭和一四年五月)。

もとは四月発行分向けに掲載を依頼したものが、五月発行分  
の掲載となったことが窺える。

昭和一四年四月一日付南木芳太郎書簡(小野文庫)

それで甚だ勝手なお願ひで御座いますが、百号記念として「百人随  
筆集」を編みたいと存じますので、御好誼に甘えませんが御祝下さる  
意味に於て御一人一ページ程度で、本号に対する御感想なり又何か  
随筆的のものを御投惠預り、誌上を飾つて頂けばこの上もない光栄  
に存じます、

「法花歌だいい」(『上方』第一〇一号、昭和一四年五月)。書  
簡本文は印刷文面。その裏面に「法花歌だいい」の下書きら  
しき文章が鉛筆で記されている。

昭和一四年五月二一日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

来月は増頁の筈二付清元研

究御送与願上候 図彙は

百人一首のお茶ひき

都々一つ系の扇歌

右二点二致度解説御無心仕候 図彙は若いものを取合せ度候 左様に御心添御願申上候

昭和一四年五月二二日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

清元研究難有拝受仕候 続々御援助くれく御願申上候

昭和一四年六月二八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

解説落掌御筆劣感謝

「道行旅路の嫁入（上）」（『江戸読本』第二巻第七号、昭和一四年七月）

「江戸図彙 都々一坊扇」（『江戸読本』第二巻第七号、昭和一四年七月）

「江戸図彙 お茶を挽く」（『江戸読本』第二巻第七号、昭和一四年七月）

昭和一四年八月二〇日付母袋未知庵書簡（小野文庫）

「古川柳研究」誌御手許に届けるやう云つて置きました。其中に同誌へも御寄稿下さいませ。

『古川柳研究』一〇五三（昭和一四〇二三年）には全号にわたって寄稿なし。

昭和一四年八月二二日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

当月乍御迷惑是非御寄稿御願申上候 解説は残二点分御遣し被下度候 又七遊談の中より妾を出したく此分も同事願上候 九月号昨日出来 只今は御入手と存候

昭和一四年八月二六日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

図彙解説手際怪敷間に合はせ置候 清元の何方分御願申上候

昭和一四年八月二八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

暑気執拗之处御執筆感悦此事候 唯今相届早速通達仕候

「歌へすく余波大津絵」（『江戸読本』第二巻第一〇号、昭和一四年九月）か。

昭和一四年九月一四日付三田村鳶魚書簡（天理）

当月分清元研究何分宜敷御願申上候

昭和一四年九月二八日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

清元原稿落掌御礼申上候 拝借物は尚二点残居候間今月解説相済候

ゆゑ来月早々返上之心得二候 先日笹本へ御申聞之由に付右申上候

「色増艳夕映」（『江戸読本』第二巻第一号、昭和一四年一〇月）か。

？

昭和一四年一〇月二三日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

別封 吉原大黒舞 七遊談 返上仕候 乍毎度清元宜敷御願申上候

昭和一四年一二月二九日付三田村鳶魚書簡（小野文庫）

高文御送被下難有御礼申上候 御多般之中一入二存候

「歳旦 豊春名集寿（上）」（『江戸読本』第三巻第一号、昭和



その中御送り致します 是非何か歌謡に関する御文章頂きたく存じます 「伊勢音頭」の未翻刻ものの活字化でも結構ですが

寄稿を依頼した雑誌名が不明。送付された雑誌は、あるいは

『民謡研究』（小野<sup>345</sup>）五冊か。

昭和十五年二月九日付三世清元梅吉書簡（小野文庫）（前掲）

『清元流報』第二号の所在を現在までに確認できず。

以上、眺めてきたように、書簡が現存する範囲に限っても、大正一四年から昭和一五年にかけて多くの寄稿依頼が忍頂寺務に対してなされていたことが確認される。このように多くの寄稿依頼がなされていたということは、務が一定の水準以上の力量をそなえた書き手であると各方面から評価されていたことを示していると理解できよう。

務の著述のうち具体的にどれが寄稿依頼に応じて書かれたものなのかという点については、書簡のやりとりの中で論題を明確に示していないものが大半であるため、はっきりと特定することが難しい場合も多いのであるが、依頼原稿であることがほぼ確定できそうな例（および）を付したものの（のみにしぼった場合でも、計一七点を数えることができる。寄稿依頼の書簡が全て現存しているというわけではないことを考えれば、実際の数はもっと多くなることが予想される。

依頼の相手に注目すると、現存する書簡資料の範囲では、特に、三田村鳶魚からの執筆依頼の多さが目立つ。これは、鳶魚が、自身の関わる雑誌（『彗星 江戸生活研究』『江戸読本』）の刊行を維持していくために助力を求めたことによるものと考えられる。

また、初期においては石川巖や三田村鳶魚など個人的な知友からの寄稿依頼が中心であるが、昭和四年頃より、個人的なつながりによる依頼というよりも、研究者としての実績にもとづく依頼と目されるものが見られるようになるという傾向も認められる。具体的に言えば、「昭和四年八月一日付木谷蓬吟書簡」には「郷土研究の先輩たる貴台」という文言が見られ、それまでの務の著述活動を評価した上での寄稿依頼であることが窺われる。また、「昭和四年一〇月二三日付石割松太郎書簡」では「さて誠に御馴染もうすきに勝手なる御願ひに候が」と、個人的なつながりが薄いことが述べられている。務の本格的な著述活動は、大正一三年の『大江戸之研究 延寿清話』発刊に始まるが、それから五年ほどのうちに、研究者として広く認知され、その実績にもとづいて寄稿依頼がなされる立場となっていたことが、これらの書簡より読み取れるのである。

さらに、もう一つ注意されるのは、寄稿依頼に応えなかったと思しき例も多く存するという事実である。執筆がなされなかった依頼のうち、例えば「大正一五年二月一日付磯ヶ谷紫江書簡」の『墓蹟』、「昭和三年一月二五日付有山麓園書簡」の『俳三昧』、「昭和九年一月一日付尾崎久弥書簡」の『観音』、「昭和一四年八月一日付母袋未知庵書簡」および「昭和一四年一月一六日付母袋未知庵書簡」の『古川柳研究』などについては、各雑誌の趣旨と務の関心の方向性とにズレがあつて執筆をしなかつたと推察することもできそうであるが、一方で特定の理由を想定しにくい場合も多い。また、執筆はしているものの、当初依頼の期日を過ぎていたケースも、「昭和一四年三月二二日付三田村鳶魚書簡」で依頼された『江戸読本』への寄稿をはじめとして、いくつか認められる。

これらの背景の事情として、一つ考えられる可能性は、著述活動に対

する務の姿勢が影響していたということである。務の著述態度に関して、務と親交の深かった西村貫一は、次のように述べている(6)。

西村貫一「思い出すまゝ」(『金曜』第三卷第一〇号、昭和二六年一月)

こう書き立てると、忍頂寺君は所謂宣伝屋で、他人を押し付けて自分が先きにくと立ち走り度がる人の様に感じるかも知れないが、その正反対。彼は恐ろしく厭人的な所がある。遠慮家だ。原稿でも「私の記事なんか読んで下さる人は有りませんよ」と逃げを張り、再三再四云はないと書いてくれない。是非にと云ふと「それでは」と送つて来る。(四ページ)

僕は雑誌「金曜」にはいやと云ふほど執筆願つておいたと云ふより、忍頂寺君に原稿を書かせた。あれだけ書かせておけば、悔む所なし。どうせ持つて死ぬるものでない、後人のために書き残したほど幸な事はあるまい。立派な人間のみの出来る仕事だと思つてゐる。(六ページ)

西村は、務の著述活動への向き合い方に、自らは積極的に前へ出ていくとしない、言わば一歩ひいたようなスタンスを見出している。これは西村の印象であるため、実際の務がどうであったかは改めて慎重に検討する必要があろうが、ここで述べられている務の姿勢には、寄稿依頼に対する態度と一脈通じるものがあると言える。その背後にあった要因として考えられるのは、務の貿易商としての一面である。務にとって、生活に必要な

な収入を得るための本業としてあったのは、あくまでも貿易業であった。近世歌謡の研究や著述活動は、本業と両立して成り立たせるべきものであつて、専業の文筆家になることを目指していたわけではなかった。執筆依頼に応えなかつたり、依頼された期日を過ぎて執筆された例があつたりするのは、執筆活動よりも本業である貿易業の業務の方を優先させる姿勢による結果と見ることもできるのではなからうか。寄稿依頼の書簡から読み解けるこうした情報は、忍頂寺務という人物を、単に歌謡研究者という一面からのみくくつて捉えてしまうことには慎重になるべきであることを示唆するものであると思われる。

#### 四、書簡資料から見る忍頂寺務の交友関係

##### 芸能関係者との交友

本節においては、書簡資料をもとに忍頂寺務の交友関係の一端を明らかにしていきたい。現存する忍頂寺務宛書簡は点数が多く、差出人も多岐にわたるが、ここでは、それらの中から特に芸能関係者との交友に焦点をしばつて考察を行う。

#### 四・一、五世清元延寿太夫

小野文庫の忍頂寺務宛書簡には、清元関係者から差し出された書簡もさまざま存在する。当時の清元宗家家元であつた五世清元延寿太夫からの書簡も二点存し、務との間に直接的な交友のあつたことが確認されるのであるが、ただし、それらは暑中見舞いと年賀欠礼の八ガキであり、いずれも簡

潔な内容であつて務との関係を深く知ることは難しい。しかし、次にあげる「昭和一七年四月五日付井口政治書簡」からは、五世清元延寿太夫が務の清元に関する研究を高く評価し、信頼を寄せていたことが分かる。

昭和一七年四月五日付井口政治書簡（小野文庫）

小生も一昨年の夏から延寿太夫の口述を筆記、昨春は都新聞に連載しましたが、法木書店の老主人が出版をいそぎますので遅々として延寿との中間にあつて困却是非なく其一部を組版として二三百頁のものが出来上つて居り升が名人気質の延寿太夫は中々ことでは気が済まず、先日伊東の別荘を訪ねましたところ、

近頃清元の節が崩れて困る それには字句の解釈がほんとは出来ないものばかりだから、私は之迄のやうな逸話経歴などの物語を私の名で出版するよりは、三味線の手と語り方を十段でも二十段でも書いて貰ひ、之に忍頂寺さんの御出版になつた解釈（全文でなくも少々短くして）を上段に附して共に清元将来の為に残して置きたいと思ふが忍頂寺さんは遠路であるから甚だ申訳ないが君から一応御意を伺つて呉れと

と申されました。（中略）何とぞ春陽堂出版の御著「清元研究」及び三田村先生出版の「江戸読本」から抜粹させて頂くことを御許し願へれば幸甚です。

昭和一七年四月一〇日付井口政治書簡（小野文庫）

今度は誠に厚かましき事御願ひ申上ましたところ早速御承引下さいまして有難く厚く御礼申上ます。今夏関西へ参る予定につき其折親

しくお目にかゝり万々御礼申上り

切今後もいろく御指導仰ぎたく御助力のほどくれぐも御願ひ申升

書簡および封筒に差出年の記載はないが、本文中に「一昨年の夏から延寿太夫の口述を筆記、昨春は都新聞に連載」と、差出年推定の材料となる記述がある。後に引用する五世清元延寿太夫『延寿芸談』の「あとがき」（井口政治執筆）によれば、都新聞の連載は昭和一六年一月から約二ヶ月のことであるため、本書簡は昭和一七年四月のものと同断される。この書簡からは、五世清元延寿太夫が務の清元注釈を重視していたことが読み取れる。なお、四月五日付書簡の封筒には、務の令嬢である小野麗子氏の筆跡で「大切に」と記入されている。小野麗子氏によるこの注記が、務から伝え聞いた何らかの情報にもとづいてなされたものであると仮定するならば、清元宗家家元から高い評価を受けたということに、務自身も自負を抱いていたことが窺われる。

また、五世清元延寿太夫『延寿芸談』中にも、務の研究を参照している箇所のあることが確認される。

五世清元延寿太夫『延寿芸談』(7)

清元については忍頂寺さんが中々好く調べられ、種々の物にお書きになりましたので、ここにはその系譜のくわしいことを避けてお話ししましょう。(一三五ページ)

忍頂寺さんの本にも

「世に清元の流行したのはこの太兵衛の手柄で古老の話を聞くと独吟二吟というものは太兵衛から始まった事で、外の流儀には余り無い、太兵衛が美音であったから左様なことを始めたものと見える。この時代に語り口が大分違って来た」

とありますが、考えて見ると間(ま)の長い人ではないかと思いません。(一三七―一三八ページ)

五世清元延寿太夫の著書の中で務への言及が見られることについては、西村貫一も次のように述べている。

西村貫一「思い出すまゝ」(『金曜』第三卷第一〇号、昭和二六年一月)

先年死んだ清元宗家五世延寿太夫の著書を読んだと、ちよいと「忍頂寺先生」と云ふ字にぶつかると。(二ページ)

このように務の研究が、近世文学の研究者のみならず清元宗家家元という邦楽界の実力者からも高く評価されるものであったという点は、注目に値する。

#### 四・二、清元佐登美太夫

続いて、同じく清元関係者の中から清元佐登美太夫の書簡を取り上げる。

年次不明一〇月二二日付清元佐登美太夫書簡(小野文庫)

就きましては少々伺ひ度き事が御座いまして今日本村町へ伺ひました処最早御帰邸なすつたとの事承り誠にざん念に存じました。実は今より五六年前でしたか御許様の御編輯になりました清元研究と申す御本を家元若太夫がぜひ一部買受け度と申せしゆへ各所本やを取調べました処何処にもありません為め御許様に伺ひましたら何処か御心当りの処が御座いましたら誠に恐入り升が一寸御しらせ被下度御願申上候

年次不明一〇月二九日付清元佐登美太夫書簡(小野文庫)

就ては此度は御迷惑なる 御願申上候処早速に御返書賜り誠に有かたく御礼申上候 何卒御繁忙の御中恐入候へ共宜敷御願申上候

書簡中に、務が市ヶ谷本村町から神戸へ帰ったという話題が出てくる。務の帰神は昭和一二年春であることから、この書簡も昭和一二年のものと推測される。『清元研究』(昭和五年)の出版について「五六年前でしたか」と述べている点も、昭和一二年の書簡であるとすれば齟齬はない。

この書簡で注目されるのは、「家元若太夫」が務の著書の入手を希望し、そのために清元佐登美太夫が手を尽くしているという点である。この「家元若太夫」とは、当時の清元宗家家元・五世清元延寿太夫の息子である四世清元栄寿太夫を指すと目される。小野文庫には四世清元栄寿太夫から務へ差し出された書簡も二点存するが、いずれも転居通知のハガキであり、具体的な交友の姿は窺えない。しかし、これらの清元佐登美太夫の書簡により、四世清元栄寿太夫が務の研究に高い関心を抱いていたことが確かめられる。先に取り上げた五世清元延寿太夫の場合と同様に、務が同時代の

清元関係者から一目置かれる存在であったことを知ることができる。

#### 四・三、八代目坂東三津五郎（三代目坂東八十助・六代目坂東養助）

最後に、八代目坂東三津五郎の書簡を取り上げる（8）。八代目坂東三津五郎は、博識で学者肌の役者として知られるが、小野文庫には、その三津五郎が疑問を感じた点について務へ問い合わせていたことが分かる書簡が存する。三津五郎をして、務の学識に頼る面があったという点は、当時における務の研究の評価・位置づけを考える上で重要である（9）。

務と三津五郎との交友は、三津五郎が『延寿清話』を読んで感銘を受け、三津五郎の側から務へ書簡を差し出したことよって始まったことが、小野文庫所蔵の書簡によつて確かめられる。

#### 年月日不明坂東八十助書簡（小野文庫）

実は先日私方作者竹柴二作の手を経て河竹繁俊氏より『延寿清話』拝借いたし其の御考証の深きに驚き入り候 父三津五郎も至極興味を以て拝見致し候次第 私宅にて震災にて稽古本其他舞踊に関する書籍も多少之有り候へ共焼失いたし先日も富本稽古本を少々他より貰ひ候 当方に之有り候物なれば御申越し次第御送り申上げ候 尚厚顔なる御願なれど御発行の節は御送り下さり候へば幸甚の至りに御座候

（同封八ガキ）大正十四年四月二七日消印

扱て本日は雑誌を御送附に預り正に受納仕り難有御礼申上候

この書簡で三津五郎は、『延寿清話』の送付を希望すると同時に、自身の家にある資料の貸与をも申し出ている。また、次に引用する書簡では、務の考察内容について、自身の父親である七代目三津五郎に問い合わせて確かめた結果を報告している。

#### 大正一四年五月二三日付坂東八十助書簡（小野文庫）

昨夜「延寿清話」第七冊有難く拝受仕り候 早速拝見仕り候所清元の文屋と喜撰の條に父（三津五郎）の談話に附いて誤謬を含むとの御説御賢察の通りに御座候 其夜早速父に承り候所

『演芸画報の記者に話した事はそうでは無いと思ふ 私は故花柳勝次郎（名人の）に文屋を教へられ其節（是は歌右衛門の型だからよく覚えて居てくれ お前さんの家の三津五郎の型もあるとの事だが私は知らない）と勝次郎さんは申しました 尤も勝次郎さんが誰から歌右衛門の型を教わつたかは知らないが それから小石川の三津江に私家の型を聞うくと思いつゝ延びくになり三津江も先年物故したので実に残念に思つて居る』

右之如く父は申し候 それに就き言訳らしく候へども一寸役者と演芸記者とのお話を御存知とは思ひ候へども申上候 先づ記者が何か役者に談話をと思ひ候時は芝居の部屋に参り忙しい幕間に役者に座談的に聴きそしてその話を元に原稿を作り（勿論その原稿を役者に一応見せるやうな親切も無之）早く雑誌なり新聞なりへ出すの故随分間違ひし飾りも付き候為め往々役者も迷惑致し候

自らの学識を深めようとするとともに、務へも研究上の材料・情報を

提供しようとする、学問的な態度にもとづく交際の様子が窺われる。

また、以下に引用する二点の書簡においては、自身の疑問点を務に問い合わせている。前述の通り、三津五郎が務の学識に厚い信頼を寄せていたことが分かる。

昭和四年二月二日付坂東叢助書簡（小野文庫）

清元の「再春菘種蒔」の問答の終りに

「あゝらやうがましや 左あらば鈴をまゐらせう こなたこそとありますが此「こなたこそ」の意味、出所がはつきりしませんので父に調べると言ひ付けられました。日本戯曲全集の舞踊編（春陽堂）謡曲文庫狂言編（斎藤香村編 三番叟、初日、二日三日の型）長唄翁千才三番叟、能楽大辞典等にも「こなたこそ」はありません。もしお判りでしたら御教へ下さい」

年次不明九月二八日付坂東叢助書簡（小野文庫）

「山帰り」のないとこ唐人で思ひ出しまして、私も先頃から疑問に思つて居る事がございますので、先生に御伺ひいたします。

諺語大辞典の中に「台所唐人」と云ふのがありまして註釈には不詳としてございます。

も一つ文化十年「四季詠寄三文字」の内（是は御承知でせうが三津五郎十二月）水無月の部に祭台所唐人と云ふ名で踊があります。台所唐人とは何の事でせうか、嬉遊笑覧にもありません、もし御存じでしたら御教示下さい。曲及び稽古本も残つて居ない如くです。

（中略）

も一つ、是は佐々醒雪さんの俗曲講釈江戸長唄の中に大変な間違ひがありますから、先生から何か発表していただき度いと思ひます。それは四一頁の三番の評釈の中に

森田座の沢村淀五郎の為に七変化「倭仮名七文字」を作つて居るが

とありますが、私の知つて居るのでは「倭仮名色七文字」三世三津五郎です。淀五郎ではありません、是は慥に間違ひだと思ひますが、如何でせう。名題の中に倭（やまと）と云ふ字を入れた事などから考へてもさうだと思ひます。尚記録としても、文化五年十一月森田座三世坂東三津五郎 長唄常盤津 倭仮名色七文字」とあります（雑誌邦楽四巻六号）

右の二件御調べ下さいませ様御願ひ申します。何卒御上京の節は御立寄下さいまし。

「沢村淀五郎」「倭仮名七文字」の傍線は原文のもの。

余白に以下の通りの務の書入れあり。

「台所唐人」きたない風姿をしたる外国人、現今のマドロス

これらの問い合わせの内容を見ると、三津五郎は疑問に感じたことをすべて無分別に問い合わせているわけではなく、まずは自身で文献を調査し、それでも分からなかった点について務に教示を仰いでいることが分かる。言わば、最後に頼れる相手として務のことを認めていたことが読み取れる。なお、年次不明九月二八日付書簡で述べられている「台所唐人」という語は、次に引用する廣田星橋の書簡にも話題として登場している。

大正一五年一〇月二六日付廣田星橋書簡（小野文庫）

拜啓 陳者「台所唐人」の踊りの事二付八十助氏よりは未だ何等の訪問も受不申候

この踊りは今の踊の師匠たちは余り知らぬやうに御坐候 私未だ詞曲の本も知らず、然しこれは吉原の幫間者 に行はれたことは確實である

書簡中に「八十助氏」（「八代目三津五郎」とあることから、恐らくこれは、務が三津五郎からの質問を受けて、さらに廣田星橋に問い合わせて示教を願ったものと考えられる。廣田星橋は、年次不明一二月一三日付書簡においても「台所唐人」について論じており、務との間で複数回にわたって意見交換がなされていたことが確かめられる。これらの書簡のやりとりからは、務の側も、三津五郎からの質問にきちんとした回答ができるよう努力し、誠実に対応していたことが読み取れる。

また、務の側から三津五郎へ協力を願うケースもあった。次に引用する三津五郎の書簡は、務が著書『清元研究』（昭和五年）を刊行するにあたって、図版に用いる写真の貸与を依頼したことに対する回答である。

昭和五年二月九日消印坂東衰助書簡（小野文庫）

色々さがしたのですけれど 北州 おはん おそめ 卯の花 双六 だけは どうしてもありません

それから写真の裏に 六義居ろくぎきの印のあるのだけは御用がすみましたらお返し下さい 外のは全部差上ります

印のあるのは宅に是一枚だけしか無いのですから でも御使用期間

はいつまでゞも結構です

『清元研究』には、実際にこれら三津五郎から提供された写真が図版として掲載されている。また、書簡中に一部の写真を贈与する旨が述べられているが、それらの写真は現在、小野<sup>467</sup>（写真（清元関係））の中に一括して保存されている。なお、小野文庫に所蔵されるこれらの写真の中には、一部、裏側に三津五郎自筆の書入れがあるものも含まれている。

『清元研究』が刊行された際には、協力への感謝という意味合いであるう、務より三津五郎へ献本がなされている。次に引用する書簡は、献本に対する三津五郎からの礼状である。

昭和五年五月二九日付坂東衰助書簡（小野文庫）

此度は御丁寧な御手紙と共に清元研究御恵与下されまして真にありがたう存じます

私などは延寿清話清元研究両書共に製本いたさせ所蔵して居りましたがそれでも製本前一二冊たりなくなつて居りましたを此度単行本と成りました事は誠に喜しく

それに私如きものゝ写真をおのせ下さいましてたゞゞく恐縮の外は御座いません

以上、書簡資料を通じて、務と八代目坂東三津五郎との交友について検討してきた。その結果、三津五郎は務の学識を信頼して自身の疑問を問い合わせ、務は研究活動の上で必要な資料の提供を三津五郎に依頼するという両者の関係が存在していたことが明らかとなった。務と三津五郎の間では、互いを認め合った上での、学問的な交流がなされていたと言えよう。

おわりに

忍頂寺務宛書簡資料は、小野文庫に所蔵されるだけでも一三六五点と分量が非常に多く、その内容や差出人も多岐にわたる。書簡資料から得られる情報量は膨大であるが、それを実際に研究に活用できるようにするためには、まず資料の整理を行って必要な情報を効率よく引き出せる仕組みを作り上げることが重要である。今回の共同研究の成果として、書簡資料の全点調査を完了し、目録を整備して、さらに目録データを附録CD-ROMに収録することで、検索の便に供するところまでたどりつけた。ようやく書簡資料を活用できる基本的な環境が整うに至ったという段階である。

書簡資料は、直接的にはその差出人に関する情報を引き出せるという点で有益であるが、それと同時に、多様な人々から寄せられた書簡に含まれる情報を総合することによって、忍頂寺務という人物をより多面的に捉えていくという方向での活用も期待される。近世風俗文化学に関わる研究の今後の発展のために、各方面で活用されることを願うものである。

最後に、貴重な書簡資料を長年にわたって大切に保管し続けてこられた故・小野麗子氏に敬意を表して、稿を終えることとしたい。

## 注

(1) 小野文庫には務の令嬢・小野麗子氏の手による「忍頂寺務略年譜」(小野474)が存するが、その中でも言及はない。

(2) 「三田村鳶魚の輪講会」、『三田村鳶魚全集』第二七巻「月報」、一九七七年六月。肥田皓三氏の御教示による。本報告書所載のシンポジウム「パネルディスカッション」参照。

(3) 本稿において新たに報告した忍頂寺務の著述に関する情報は、全て本報告書所載の肥田皓三・近衛典子編「増補改訂忍頂寺務著述目録」に反映されている。

(4) この昭和六年七月二十七日付三田村鳶魚書簡において「折柄今昔へ御加勢願上候」と述べられているのは、昭和六年八月発行の『今昔』第一巻第八号より、発行元が上田泰文堂から島田筑波個人へと変更になることを踏まえての言であると考えられる。この一件について、『今昔』第二巻第八号の「編輯後記」(島田筑波執筆)では以下のように述べられている。

今昔は今月号から上田栄吉氏の手を放れて、僕が発行兼編輯の一切の責任を負ふことになった。これは七月号今昔第二巻七号を以て最終としたいと上田泰文堂から突然に廃刊を申出られたからである。

(中略)

三田村鳶魚先生は惜しく共将来苦勞の種であるから思切つて廃刊してしまひと親切に心配をしてくだすつたけれども、まあどれまでつゞくか出来るだけはやつてみるつもりで引受けてしまひました。以上の事情ですから、今後は一層の御援助を願います。

三田村鳶魚は、『今昔』第二巻第七号(昭和六年八月)で「寄稿贊助」の一人として名を連ねており、また、『今昔』終刊に至るまで継続的に原稿を寄せている。当該書簡の「御加勢」の解釈に関しては、シンポジウムの折に福田安典氏より、『今昔』への攻撃の意図を読み取るべきとの意見が出されたが(本報告書所載のシンポジウム「パネルディスカッション」参照)、以上の点から、これはやはり『今昔』の続刊に向け務の応援を要望したものと解釈すべきであると考える。

(5) 封筒表面に貼付された務自筆の付箋では、差出年月日を「昭和一四年六月二〇日」と誤記している。『天理図書館稀書目録』も「昭和一四年六月二〇日」と記載するが、封筒に捺された消印は「昭和一四年三月二〇日」となっている。

(6) 青田寿美氏の御教示による。

(7) 引用は、延寿芸談刊行会の複製(昭和四四年)による。初版は昭和一八年に三杏書院より刊行されている。

(8) 小野文庫に所蔵される書簡の差出人名は、書簡が差し出された当時の名で「坂東八十助」「坂東義助」と記されている。以下の書簡引用においては、それぞれの書簡に記された差出人名で表示する。

(9) 武井協三氏の御教示による。本報告書所載のシンポジウム「パネルディスカッション」参照。

## 参考文献

青田寿美・飯倉洋一・内田宗一・福田安典・山本和明・鷲原知良(二〇一一)「仙台

忍頂寺家所蔵資料目録」(『調査研究報告』三一、人間文化研究機構国文学研究資料館調査収集事業部)

青田寿美・内田宗一・大内瑞恵・太田路枝・神林尚子・佐山美佳・丹羽みさと(二〇

〇八)「大阪大学附属図書館蔵小野文庫目録」(『調査研究報告』二八、人間文化研究機構国文学研究資料館調査収集事業部)

青田寿美・内田宗一・尾崎千佳・川端咲子・近衛典子・富田志津子・福田安典(責任編集)・正木ゆみ・鷲原知良(一九九八)「文学部創立五十周年記念 忍頂寺文庫特輯」(『語文』第七〇輯)

内田宗一(二〇〇七)「小野文庫蔵忍頂寺務宛て書簡について 調査の中間報告と

考察」(二〇〇六年度大阪大学大学院国文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』二)

福田安典(二〇〇〇)「上方文人、忍頂寺務」(『文学』隔月刊第一巻第五号)

資料の引用に際し、漢字は通行の字体に改めた。また、引用文中の は未判読の文字を示す。

## 〔付記〕

翻刻許可をいただいた大阪大学附属図書館、天理大学附属天理図書館、図版掲載許可をいただいた国立国会図書館に深謝申し上げます。

なお、書簡の引用にあたっては、個人の名誉を傷ついたり人格を侵害したりしない範囲内において行い、書簡の差出人及び書簡内で言及される人物に対して十分に配慮した。書簡の翻刻に関する責任は、全て内田が負うものである。

## 〔追記〕

本稿の成稿後、小野文庫<sup>422</sup>「忍頂寺務宛書簡」に収められる書簡の中に、寄稿依頼の内容を含む書簡がもう一点存することが判明した。該当の書簡は昭和一八年一月二日付森井康雄書簡(書簡<sup>1231</sup>)で、務に対して清元の注釈原稿ほか複数の記事の執筆を依頼しているが、誌名が不明であり、務が依頼に応えて執筆したかどうかも判然としない。書簡の中では、計画のみで実現が困難である旨が述べられており、あるいは刊行に至らなかったという可能性も考えられる。当該書簡に関する情報の詳細については、本報告書所蔵の内田宗一「小野文庫所蔵忍頂寺務宛書簡目録・解題(附・差出人氏名リスト)」を参照されたい。



# 關西版に目をつけて

## 歌謠本を捜す

苦心の集成『都踊くとき』

忍頂寺 務氏

私が歌謡の本を漁りはじめてから廿年にはなりました。はじめは神戸高商を出て實業に従事する傍ら江戸時代の歌謡を調べはじめたのですが、草双紙や源本の方面白くなり遊んで居ると、今人手が横がり、今では一瞬して専らで本を捜してゐる。徳川時代の歌謡の本を捜してゐる。私が流路の洲本中學に通つてゐた頃、校長は永田南蔵氏、昨年物故した子規派の有名な俳人大谷鐵石氏は英語の教師だったので三年になつた頃から俳句をやりはじ

めした。後に併城の居士と語られた高田繁茂は同級生で非常に學問の出来る人でしたが俳句に際り出してから成績が悪くなり手出し卒業しました。私が歌謡のものへ導かれたのも俳句の影響で、また歌謡の本に熱心になつたのは元來長興、清元などが好きだからでせう。

徳川時代の歌謡の本といへば何でも江戸で出たものさうに考へられ大抵の人は徳川版に注意しません。が、私は高橋上今でも神戸を離れられないといつた都合から大阪本にも親しみ、殆ど一人の研究者である京大の藤井泰隆博士に教へられながら大阪府北摂地、京の西を遊びながら歌謡が行はれてきたかよくわからないのです。さら

に下ると今度は江戸が流行の中心に奪つてこれはいくらも材料があまり、寶塚からは草双紙が流出してゐるのでその中から歌謡を拾ふことも出来ず、潮來節など安永から文化、文政まで約五十年の長きにわたつて流行したの多くの歌謡が残つてゐます。さらには安永ごろからの二十一年、天保ごろの落しに歌はれた都々逸なども海山残つてゐます。

で、幸保、寶塚の間に行はれた歌謡ですが少しはわかつてゐるもので、例へば都踊くとき、えびやくど、大阪の兵庫くとき、後に越後くとき、の如き「くとき」系統は違ふが伊勢音頭、京都のみどり音頭の如き「音頭」はこの間のもので、私は「都踊りくとき」は苦心集五冊まで集めたが、これは京大、大阪の南木文庫、名古屋の伊藤家、上野圖書院に各一冊、「近代歌謡集」を編んだ藤田徳太郎氏のところに、二冊、同書の内容を手にした山村太郎氏のと

いへこれほど極めて少く、先に手に入れた百八十三冊納められてゐる一本は最も大部なものでせう。その他の歌謡は互版などで知るばかりかもしれませんが潮來節のやうに長く

骨が折れます。しかし歌謡だけは互版一枚の愛見によつて學者の説を覆しますからそこに楽しみもあるといふものです。

余談ですが安田文庫に延喜九年出版の『宋書目録』といふ書



原書に記があり、島原のものが多いといふことも珍しいものとして先年復刻されました。「序」だけでほかのものはないものとされてゐたのですが、ついこの間は東京で朱倉道目「後追」といふの手に入れました。端本ですから、もう一冊手に入り完本になつたら、一寸感張れさせよう。それから岡本文庫の澤瀉清には徳川本はないといはれてゐましたが大阪で「さくら」天神「を發見し高野、藤井南博士に珍しがられました。徳川三十六聲の巻一の五冊揃ひ、これは享保十七年版の三線の譜の本で音楽學校にしかあつたのを見つけた。私は仕事上の都合上今度ばかりつと長く東京にゐなければならぬので、この「市ヶ谷本村町」に假寓し、神戸に書物を残して置くに忍びを好まざるのだけは持つて來ました。が火事がこはつてステークスに焼けてしまつて來ませんでした。父の代からのもので、父の蔵書関係人にお目にかけるやうなものではあります。この譜は假寓に蔵書を置く忍頂寺氏と愛用の歌

図版2 『東京日日新聞』昭和9年9月21日（国立国会図書館蔵）  
掲載の写真は現在仙台忍頂寺家に保管されている。本報告書口絵参照。